

平成24年度

平和大使長崎派遣事業報告書

未来へ続く
平和の架け橋



松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使長崎派遣募集	3
平和大使名簿	5
平和大使長崎派遣行程	7
平和大使長崎派遣報告会	14
平和大使の報告	16
「平和」	阿部 秀大・・・・17
「伝えていきたい」	茂出木 美樹・・・・19
「原子爆弾の恐ろしさ」	小澤 美羅・・・・21
「平和な世界」	笠原 卓人・・・・23
「幸せ」	播磨 渚生・・・・25
「忘れてはいけない」	内海 渚・・・・27
「未来を築く」	大津 みちる・・・・29
「平和の大切さ」	小俣 さやか・・・・31
「六十七年前の夏」	佐藤 優海香・・・・33
「忘れられない長崎の悲げき」	阿部 裕美・・・・34
「次世代へ贈る言葉」	宮本 龍一・・・・36
「止まった時間」	樋口 杏・・・・38
「あの一瞬で・・・」	高橋 あみ・・・・40
「平和大使長崎派遣に行って」	遠藤 未羽・・・・42
「原爆について学んだこと」	後藤 陽・・・・44
「広めよう 被爆者の想い」	鈴木 里歩・・・・45
「平和と過去」	岩崎 いぶき・・・・46
「原爆のおそろしさ」	伊藤 梢・・・・47
「過去から未来へ」	紀藤 颯斗・・・・49
「生きていることの大切さ」	川村 香奈美・・・・50
「長崎で感じたこと」	石井 そら・・・・51
「長崎平和大使になって」	中山 皓一朗・・・・53
平和大使長崎派遣事業を終えて（ 随員職員 ）	55

長崎平和宣言（平成24年8月9日）	62
歴代平和大使名簿	70

～ 平和大使長崎派遣にあたって ～

松戸市は、昭和60年3月に「世界平和都市宣言」を行い、これまでさまざまな平和事業を実施して参りました。

8月9日、6日の広島に続き被爆67年目の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が開かれました。今年の式典には、米国政府代表として駐日大使が出席し、さらに式典に参列した諸外国の政府関係者は核保有国を含む、42カ国となり、核兵器廃絶を模索する世界的な流れが出来つつあることが感じられます。

そして、長崎市長は平和記念式典の平和宣言の中で「政府は非核三原則の法制化とともにこうした取り組みを推進して、北朝鮮の核兵器をめぐる深刻な事態の打開に挑み、被爆国としてのリーダーシップを発揮すべき」だと要請し、また、「福島で放射能の不安に脅える日々が今も続いていることに私たちは心を痛めています。長崎市民はこれからも福島に寄り添い、応援し続けます」と東日本大震災での原発の事故にも言及し、原発に代わる新しいエネルギー政策実現への道筋を示すよう政府に求めました。

近年、式典に参列できる被爆者の方も年々少なくなった状況の中、当時の様子を知る術が少なくなってきたことにより、被爆体験や戦争体験の風化が懸念されるどころです。私達は、直接戦争体験を聞ける最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、未来を担う若い世代に継承することが、今、課せられた使命であると認識しています。

併せて、世界平和都市宣言の理念である世界の恒久平和を念願するということから、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、広い視野に立った施策が重要であると考えております。

平和大使長崎派遣事業を通して、松戸市の次代を担う若い世代が、被爆地へ行くことにより被爆の実相や平和の尊さを学習し、また、学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことを期待して、本事業を実施してまいります。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

・ World Peace City Declaration

[英語]

Mach 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nation wide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

・ 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使長崎派遣募集 ～

世界平和都市宣言事業 第5回「平和大使長崎派遣」大使募集

<募集要項>



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言により、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

<対象>

市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、事前、派遣、事後研修に参加できる人を対象とします。

<定員>

22名（応募者多数の場合は、抽選とします。）

引率：松戸市役所 職員3名 ・ 添乗員1名

<費用>

市の負担：長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、

8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食。

自己負担：事前、事後研修の会場（市内）までの交通費、8/7の昼食など

<申込方法>

参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

<提出期限>

平成24年5月25日（金）

<研修日程(予定)>

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

7月 8日(日) 結団式及び第1回オリエンテーション
青少年ピースフォーラム等の内容説明。

7月22日(日) 第2回オリエンテーション
戦争、原爆、平和等について自主学習します。

8月 4日(土) 第3回オリエンテーション
自主学習とスケジュールの確認。

2 派遣研修

(1) 場所 : 長崎市

(2) 期間 : 8月7日(火)～8月10日(金) 3泊4日

(3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

< 青少年ピースフォーラム >

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「平和大使長崎派遣」日程表

8/7(火)	松戸駅 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル (自主学習)	
8/8(水)	午前	自主学習
	14:00～15:00	開会行事(被爆体験講話など) < 場所:平和会館ホール >
	15:10～17:00	参加型平和学習(屋内) < 場所:平和会館ホール >
8/9(木)	午前	平和祈念式典への参列 < 場所:平和公園 >
	13:30～15:30	参加型平和学習(屋内) < 場所:平和会館ホール >
8/10(金)	ホテル → 長崎空港 → 羽田空港 → 市役所帰庁 → 市役所解散	

3 事後研修

研修の報告会を行うとともに、研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、活動報告書の作成などを行います。

～ 平和大使名簿 ～

あへ ひでひろ 阿部 秀大	(第一中学校	2学年)
もで き み き 茂出木 美樹	(第二中学校	1学年)
おざわ みら 小澤 美羅	(第三中学校	3学年)
かさ はら たくと 笠原 卓人	(第四中学校	1学年)
はりま なお 播磨 渚生	(第五中学校	3学年)
うちうみ なぎさ 内海 渚	(第六中学校	1学年)
おおつ みちる 大津 みちる	(小金中学校	3学年)
おまた さやか 小俣 さやか	(常盤平中学校	1学年)
さとう ゆみか 佐藤 優海香	(常盤平中学校	1学年)
あへ ゆみ 阿部 裕美	(六実中学校	1学年)
みやもと りゅういち 宮本 龍一	(小金南中学校	3学年)
ひぐち あん 樋口 杏	(古ヶ崎中学校	1学年)
たかはし あみ 高橋 あみ	(牧野原中学校	2学年)
えんどう みは 遠藤 未羽	(根木内中学校	2学年)
ごとう ひなた 後藤 陽	(河原塚中学校	1学年)
すすき りほ 鈴木 里歩	(新松戸南中学校	2学年)
いわさき いぶき 岩崎 いぶき	(和名ヶ谷中学校	1学年)
いとう こすえ 伊藤 梢	(和名ヶ谷中学校	3学年)
きとう はやと 紀藤 颯斗	(旭町中学校	1学年)

かわむら かなみ
川村 香奈美 (小金北中学校 1 学年)

いしい そら
石井 そら (聖徳大学附属女子中学校 2 学年)

なかやま こういちろう
中山 皓一郎 (専修大学松戸中学校 1 学年)

～ 平和大使長崎派遣行程 ～

7月8日（日）

◆ 結団式・第1回オリエンテーション

各学校から選ばれた平和大使22名に市長から任命書が交付され、大使としての抱負を発表しました。



〈任命書交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉

7月22日（日）

◆ 第2回オリエンテーション

長崎市の平和学習資料集を基に事前に学習し、感想、意見交換を行いました。

そして、長崎派遣の自主学習で行きたい場所をみんなで話し合いました。



〈事前学習〉

8月4日（土）

◆ 第3回オリエンテーション

原爆資料館へ千羽鶴を献呈するため、折り鶴を作成しました。

長崎派遣まで一週間となり、最終確認を行いました。



〈折り鶴作成〉

8月7日（火）

◆ 9:30 長崎へ出発

9時30分松戸駅に集合して、保護者、関係者に見送られ出発しました。

12時05分発日本航空1845便で、羽田空港から長崎空港へ向かいました。

13時55分長崎空港へ到着。バスで宿泊先のホテルへ向かいました。

15時50分ホテルに到着。ホテル近くへの長崎防空本部があった立山防空壕の見学に行き、その役割を学びました。



〈松戸駅出発式〉



〈立山防空壕〉

◆ 19:00 千羽鶴作成（ホテル会議室）

原爆資料館へ千羽鶴を献呈するため、大使が作成した折り鶴と市民の方々から頂いた折り鶴を使い千羽鶴を作成しました。また、千羽鶴に添える言葉を大使で意見を出し合い、「未来へ続く平和の架け橋」に決定しました。大使の思いを込めた千羽鶴の完成です。



〈千羽鶴作成〉



〈千羽鶴完成〉

8月8日(水)

◆ 9:00 自主学習(被爆建造物見学)

朝8時にホテルを出発し路面電車に乗り、原爆落下中心地へ向いました。

そこで平和案内人(ボランティアガイド)のガイドのもと、原爆落下中心地公園、平和記念公園、城山小学校等の被爆建造物を巡りました。平和案内人の方がわかりやすく説明してくださいました。



〈原爆落下中心地碑前〉



〈平和記念公園〉



〈被爆当時の地層見学〉



〈城山小学校前〉



〈城山小学校内にある嘉代子桜〉



〈被爆校舎内見学〉

2時間半のガイドの中で城山小学校を見学しました。城山小学校内に保存されている被爆旧校舎は、国の文化財登録に向けて文化庁が調査を進めています。貴重な被爆建造物の見学に大使の関心も高く、熱心に説明を受けていました。

◆ 13:00 原爆資料館到着

青少年ピースフォーラムに参加するために、平和会館へ向かう途中、前日完成させた千羽鶴と市民頂いた千羽鶴を「未来へ続く平和の架け橋」という大使の想いととも原爆資料館へ献呈しました。



〈千羽鶴献呈〉



〈松戸市の千羽鶴〉



〈千羽鶴献呈時の様子〉

◆ 14:00 青少年ピースフォーラムに参加

平和会館ホールで、全国から35団体が参加し、青少年ピースフォーラム開会行事に続いて、^{ながのえつこ}永野悦子さんから被爆体験講話を聞きました。



〈長崎市長挨拶〉



〈講話者 永野悦子さん〉

◆ 15:10 平和学習に参加

長崎市青少年ピースボランティア（高校生・大学生など）の方が中心となってレクリエーションや自己紹介を行った後、被爆の実相の学習で学んだことについて意見交換などをしました。



〈ピースボランティアによる原爆の説明〉



〈レクリエーションの様子〉

◆ 17:00 自主学習（原爆資料館）

ピースフォーラム終了後、原爆資料館を見学しました。資料館には原爆の実物大模型や当時の原爆投下時の長崎の街の風景などの資料があり、大使たちは真剣に観覧していました。



〈原爆資料館内〉



◆ 19:00 ミーティング（ホテルにて）

一日を振り返り、平和について何を学んだか一人ひとり意見を出して班発表をしました。大使としての目的を再確認し、翌日の平和記念式典に向けて意識を高めました。



8月9日（木）

◆ 9:00 平和祈念式典参列（平和公園内）

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列するため
平和公園へ向かいました。

11時2分サイレンと長崎の鐘が響き渡る中、原
爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とう
を捧げました。



被爆67周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時35分 被爆者合唱
- 10時40分 開式
原爆死没者名奉安
- 42分 式辞（長崎市議会議長）
- 46分 献水
- 48分 献花
- 11時02分 黙とう
- 03分 平和宣言（長崎市長）
- 13分 平和への誓い
- 18分 児童合唱
- 23分 来賓挨拶
- 43分 合唱 千羽鶴
- 48分 閉式



〈式典会場〉



〈平和祈念像〉



〈黙とう〉



◆ 13:30 ピースフォーラム参加

ピースフォーラムも2日目を迎え、前日に続き平和学習へ参加しました。

身近にできることを書き出して意見交換をしながらグループごとに平和宣言文を作成し、自分が平和のためにできることを発表しました。

全国の青少年と交流することができ、貴重な体験となりました。



〈意見交換、各班のまとめ〉



〈グループ発表〉



〈ピースフォーラム終了。代表者へ修了証授与〉

◆ 16:30 自由学習

ピースフォーラムを終えて最後の自由学習です。制服を着替え大浦天主堂へ向かいました。夕食を終えた後、陽もすっかり落ちたグラバー園を散策しました。そこから見た長崎の夜景は美しく、大使たちの良い思い出作りになりました。



〈大浦天主堂〉

8月10日（金）

◆ 8：00 松戸へ出発

8時ホテルを出発しバスに乗り長崎空港へ向かいました。飛行機の中では帰庁報告会の報告内容を考えました。

11時45分羽田空港着。バスで市役所へ向かいました。



〈羽田空港到着〉

◆ 14：30 松戸市役所到着

3泊4日の日程で長崎へ行って参りました。みんな元気で帰ってくることができました。

～ 平和大使長崎派遣報告会 ～

8月10日（金）新館7階会議室にて

◆ 14：30 帰庁報告会

松戸市役所で、副市長に長崎で見て、感じたことを大使一人ひとりが報告しました。



〈報告発表〉



〈帰庁報告会〉

平和大使 感想語る

松戸 長崎派遣・中学生

松戸市が「平和大使」として被爆地の長崎市に派遣した中学生が10日、市役所で織原和雄副市長に活動内容や感想を報告した。7～10日の日程で派遣され、全国の青少年らとのピースフォーラムに参加。被爆の実態や平和の尊さなどを学び、9日の平和祈念

式典にも参列した。

応募54人から選ばれた22人が派遣された。男子生徒は被爆体験者の話を報告し、「涙を流しながら懸命にその時の



状況を話したのは、次の世代に戦争は二度としてはいけないと伝えたかったからではないか」と語った。女子生徒は、現地で知り合った福島県の女の子は毎日、放射線量を測っていると聞き、「不安な気持ちがあるだろうと思い、原子力発電の存在に疑問を感じた」と話した。(川田栄)

長崎市での感想を語る「平和大使」の中学生＝松戸市で

平和大使の報告



『平和』

第一中学校 2年 阿部 秀大

長崎に行って本当に多くのことを学ぶことができました。平和の尊さ、原爆の悲惨さ、戦争をしてはならないわけ、どれも、ぼくが知らなかったことを学べて良かったと思います。

平和公園では、原爆当時の地層を見ました。茶碗や割れた皿、家のがれきなど、その当時の状況が生々しく頭の中に浮かび上がってきました。そして、今はなくなっているけれど、人の骨もうまっていたことをきいたとき、今、自分がふんでいる地面の下には、いまでもたくさん人の骨があると思うと、言葉では言い表せないやりきれない気持ちになりました。

また、青少年ピースフォーラムのときにいた被爆体験者の話では、その時の状況をよりくわしく話してくださいました。今の長崎では、想像できないほどつらく悲しい話でした。一文字であらわすらば「無」という字が思いうかびます。何もないのです。家も、お金も、そして人の命すらも原爆はすべてをうばいきっていきました。つらさや悲しみを忘れるために、長崎から遠くはなれて住んでいる人もいます。

しかし、つらくても、ぼくらのために、原爆のつらさをつたえて二度と繰り返さないために必死に話してくださいました。その気持ちに感謝して、多くの人にこのことを広めていきたいと思いました。

平和式典の一分間の黙とう。この短い時間の中でどれだけ多くの人亡くなったのかを考えるだけで悲しくなりました。原爆を経験した人はもっとつらいのだろうと思います。体の傷や心の傷は、決していえることはないでしょう。だからこそ、こんなことを二度とくりかえしてはならないのです。それがぼくたちの使命だと思

います。

いつの日か平和な未来がくるように—

『伝えていきたい』

第二中学校 3年 茂出木 美樹

1945年8月9日、午前11時2分、17都市の中から選ばれた長崎市は、4.5トンもある原子爆弾によって人間の心も体も一瞬にして奪われてしまいました。

長崎に着いて、まず初めに行ったのは、立山防空壕です。思った以上に広く、外よりもずっと涼しかったけれど、うす暗くていい気分にはなれませんでした。

次に、原爆落下中心地に行って平和案内人の方の話を聞きました。原爆が爆発したときの温度は3,000から4,000度で、太陽の100倍もの明るさで、「太陽が落ちた!!」と思うほどだったそうです。原爆落下中心地の周辺は、67年前に原爆が落ちたなんてわからないほどきれいな町並みでしたが、地下には、まだ原爆によって壊された家の瓦やレンガ、熱によって溶けたガラスなどが今でも大量に埋まっています。

他にも、平和祈念式典に出席させて頂いたり、青少年ピースフォーラムで、全国の中学生と一緒に、レクリエーションをやったり、「平和について」をテーマにグループディスカッションをしました。そこで、被爆者の方の話を聞きました。人や馬の黒こげた遺体が散乱し、遺体の中には口から内臓が飛び出している人もいたそうです。近くには、母と弟の黒焦げの遺体もあり、夜になっても周囲の山々は赤々と燃えていたそうです。私は、そんな光景を想像しただけで恐くなりましたが、被爆者の方は、その光景を生で見、どんなにつらかったのでしょうか。生き残った市民の一人一人は、「私は卑怯者だった」「私は彼を見殺しにした」などと己を責め続け、心をもバラバラに引き裂かれていきました。それに比べると、今の私達の生活

は、家族や友達が普通に生きているのが当たり前で、食べ物や衣服も十分にあり、学校にも行けています。そんな当たり前のことをできるのは、とっても幸せなことなんだと被爆者の方の話を聞いて、強く思いました。

今でも戦争をやっている国があり、世界にはまだ1万9千発の核兵器があり、長崎に落とされた物の数百倍の威力がある物もあります。そんな、今の世界は、平和だなんて言えません。一つずつでもいいから核兵器がなくなり、戦争の激しさが収まって、世界中の人が平和な生活を送れる日が来てほしいです。

そして、今、私たちができることは、周りの人への感謝の気持ちを持ち、友達や家族がいるだけでも幸せなことだということを時々でもいいから思い出すことが大切だと思います。そんな小さな感謝の気持ちや幸せでも一人ひとりが持っていれば必ずこの世界は平和になると思います。そして私は、長崎で学んできた悲惨な出来事を沢山の方に伝えて、もう二度と原爆が落とされることがないことを願っています。

『原子爆弾の恐ろしさ』

第三中学校 3年 小澤 美羅

私は3泊4日で長崎平和大使として、長崎県に原子爆弾について学びに行きました。

長崎はとてもいい町でホテルの窓から見る風景はとてもきれいで、まさかここに原爆が落とされたとはとても思えないような風景でした。

実際、原爆が落とされた中心に行ってみたら、そこにはいっぱいの折鶴が飾られていました。その中でも一番心に残っているのは、2日目に原爆のことについて教えていただいた平和案内人の話です。その人は、実際原爆を体験していて、自分が小さかった頃に母や兄弟が原爆で亡くなっていた事などを涙をためながら話していて、それを見て私も涙がポロポロと出てきました。そして、最後に私たちに言った言葉は、「食べ物や家とかなくしてもいいから家族がいればいい」ということでした。その言葉を聞いた時私達は、あたりまえのようにご飯を食べ、好き嫌いをしていいますが、それはあたりまえではないと思いました。原爆が落とされた時は食べ物もなくて好き嫌いもできないのに、今の人は普通に好き嫌いをして、あたりまえのように生きていて今の日本は本当に平和だなと思いました。私はこれから好き嫌いをせず、何より家族や友達を大切にしていこうと改めて思いました。

そして、もう一つ心に残っているものがあります。それは、3日目に行った原爆資料館です。原爆資料館には一度も行ったことがなかったので入った時、すごく驚きました。

それは、押し曲げられて割れている皿や皮膚がべろべろになった人の写真などが飾られていて、思わず声を出してしまうほど悲惨なものばかりだったからです。な

かには11時2分で止まっている時計がありました。これは実際原爆が落とされた時間をあらわしており、60年以上たった今も1秒も動いていないことにびっくりしました。時計の隣には、実際原爆と同じ大きさの模型があり、こんなに大きい原爆が落とされたのだと思うと心が痛みました。

そして、私がずっと出たかった平和祈念式典に出席しました。式典では、多くの方々が来ていてびっくりしました。最後に音楽と同時に鳩が空に飛び立った時、改めて本当に今の日本は平和だなと思いました。

この3泊4日で学んだ事を色々な人達に伝えていき、私自身も家族や友達を大切にして、この世から核兵器を無くしていき、二度とこのようなことが無いように、伝えていこうと思います。そして、未来の日本をずっと平和にしていきたいと思いました。

日本が、この世が、この世界に人々がいつまでも平和でいられますように。

『平和な世界へ』

第四中学校 1年 笠原 卓人

長崎の町、そこは限りない自然と優しい人たちによって築かれていた町だった。人間が作り上げた愚かな原子爆弾、原子爆弾によって破壊された生命や財産、そして文化。このことは決して忘れてはいけない出来事である。

8月9日午前11時2分、原子爆弾は一瞬にして、長崎の町を炎に包み込みすべてを奪っていった。逃げ惑う人や、水を求めてあちこちを探し回る人、家族を探しているのか、誰かの名前を呼び続けている人、目がつぶれてしまった人、内臓が飛び出ている人、皮膚が焼けて垂れ下がっている人。この人たちは、どんな気持ちだったのか、もしかしたら気持ちというものさえ奪われてしまったのかもしれない。原子爆弾は放射線という物質もばらまいた。放射線は、大勢の人達を死に至らせ、生き残った人たちも白内障や白血病、各種がんなどの病気で苦しめられている。原子爆弾は人々を恐怖のどん底に落とし入れた。

長崎をこんなにまで苦しめた核兵器は現在、世界に1万9千発もあると言われている。現代の核兵器は長崎に落とされた原子爆弾の数百倍もの威力がある。もし、それが東京に落とされたとしたら、簡単に計算すれば日本そのものがなくなってしまうのだ。昔の核兵器と現代の核兵器では、比べることも出来ないくらいだということを、認識しなければならない。こんな兵器がこの世界に必要なのか、必要ないに違いない。ぼくは、そう強く思った。

長崎には、日本各地からたくさんの中学生、高校生が参加し、これだけの人達が平和とは何かを考えに来ていることに驚いた。平和な世界へと進む、そのためには、私たちがのような小さな力が集まり、大きな力となり全世界の人々に平和の大切さを

発信しなくてはならない。まずは、出来るところから、平和の大切さについて考えていきたいと思う。

最後に、長崎でお世話になった方々、松戸市役所の方々、平和大使のみんな、今まで、どうもありがとうございました。みんなのおかげで、とても有意義な時間を過ごせました。これからも、平和の大切さについてみんなで広めていきましょう。そして広めるだけでなく、平和な世界を作るようがんばります。

『幸せ』

第五中学校 3年 播磨 渚生

私は、3泊4日で平和大使として長崎へ行きました。そこでは普段では体験できないことを体験しました。被爆者の方は、平均年齢が77歳を超え、語り継ぐ人が年々減ってきています。そのためにも私たち若い世代が長崎平和大使として行って学んできた、原爆の恐ろしさを沢山の人々に伝え、この世から核兵器を無くしていきたいです。私はこの体験を通じて家族や友達の大切さに気づかされました。「当たり前のことを当たり前に出ることが幸せ」だと、改めて強く思いました。

私の心が一番痛んだことは、平和の泉にある石碑を読んだときです。そこには、9歳の少女の手記が刻まれています。「のどが渇いてたまりませんでした。水には油のようなものが一面に浮いていました。どうしても水がほしくてとうとう油の浮いたまま飲みました。」とありました。今、何も感じずに水が飲める私たちの生活は、普通のことではなく特別で幸せなことだと思いました。

長崎に落とされた原子爆弾「ファットマン」で長崎は、一瞬にして何もかも無くなり、73,884人の人々が亡くなりました。平和祈念式典の一分間の黙とうでは、テレビで見るのとは違い、あの場所に立った人にしかわからないものがありました。「黙とう」と、目を閉じて、サイレンの音が鳴ると、たくさんの人々の悲しみの顔や声、赤い炎がたくさん詰まっている気がしました。原爆資料館では、血だらけの人の写真や黒焦げになった人の写真、11時02分をさしたまま止まっている時計などを見ました。青少年ピースフォーラムでは、「平和なとき」と「平和でないとき」ということを深く考え、平和なときを長く続けるための改善方法をグループで協力しじっくり考えて、発表し合いました。

私たちの今があるのも、このような残酷な歴史があるからです。この残酷な歴史を日本人は、永遠に忘れてはいけません。永遠に…

『忘れてはいけない』

第六中学校 1年 内海 渚

私は、小学校の頃は、社会に興味がなく授業にあまり参加していませんでした。

ですが、この長崎派遣のおかげで、多くの事を体験し、聞いて学び、興味を持ちました。1945年8月9日11時02分に原爆が投下されました。長崎の人々は、たくさんの命を奪われました。私にとっては疑問ばかりで、知りたい事がたくさんありました。そもそも平和大使に応募した理由は、どうして日本に落としたのだろうか？どうしてこんな事をしたのかを知りたい気持ちがあったからです。

原爆中心地では、たくさんの花束と千羽づるがありました。案内人の池田さんが、「この下には、原爆でなくなった人々が埋まっているんですよ。」と言いました。私は、人の上をふんで歩いていると思うともうしわけないなと思いました。平和公園にも、花束や千羽づるがたくさんありました。

平和祈念式典で、黙とうをしたとき私は、平和を願いながら目をつぶりました。被爆者の話は、聞いているのがつらかったです。家族や友人がなくなった人が多くいて、原爆はたった一発落ちただけなのに、こんなに大きな被害にあって、こんなに人を悲しませて、長崎の人々にとって原爆とは、思い出したくない事だと思います。でも、わすれてはいけないと思います。この原爆というおそろしい事を、平和への尊さと一緒にみんなへ届けなければいけません。

私はこの事を長崎派遣で学びました。

命は一つしかありません。だからこそその命を大切にし、人の命も大切にしないといけないと私は思います。日本、いや、世界中の人々が笑顔があふれる、平和というすてきな事を願っていると思います。

このような事を体験させていただきありがとうございます。私は、色んな人に「命」と「思い」を伝えていきます。

『未来を築く』

小金中学校 3年 大津 みちる

「戦争」この一言では表しきれない出来事が67年前長崎で起きていた。戦争は、長崎の土地を焼け野原にした。戦争は、長崎にいた人々を悲しませた。何よりも、心を傷つけた。そして一つの原因で沢山の人が亡くなった。

私は、その時に起こった出来事がどれだけ悲惨だったのかを長崎に来てから知った。防空壕に入ったとき、私はその原因のすさまじさを知った。その当時の状況からそれは伺えた。防空壕の奥にいた人は何とか助かったらしい。けれど防空壕の手前にいた人は助からなかった。たった何メートルの違いで助かる命と助からない命が分けられてしまう。その現状には驚きを隠せなかった。

私が一番鮮明に記憶しているのは、被爆体験者講話だ。当時の生々しい状況がとても伝わってきた。雲ひとつない晴れた空から原子爆弾が降ってくる。人々はそんなことを予想もしなかつただろう。その一発が長崎を黒い闇に追い込んだ。

まだ、長崎には傷跡が残っている。でも、だからこそ、その現実には私たちは目を背けてはいけないのだと思う。被爆者体験講話をしてくださった方は言っていた。

「戦争は、悲しみと憎しみをもたらす。だから絶対に戦争はしてはいけない」と。そして、死んだ人は二度と帰ってはこない。だから命は絶対に大切にしなければいけない。私は、どんなに苦しくてもどんなに辛くても絶対に死を選んではいけないのだということを強く思った。だから今の日本には長崎や広島で起きた事実をよく知っておく義務がある。

平和な未来を築いていく。それは簡単なようで難しい。けれど、私には出来ることがある。それは今回の平和大使派遣で経験したことを多くの人に伝えていくこと

だ。私はこの派遣でまた一つ大切なことを学び、大きく成長できた。そして、ただ願うのは世界中の人々の心が平和であり続けることだ。

『平和の大切さ』

常盤平中学校 1年 小俣 さやか

4日間を通して感じたことは書ききれないくらいあります。

私が最初に原爆を知ったときは、「かわいそう」と思いました。原爆が4,000度あったことや、皮ふが垂れ下がってしまうくらいなんて知りませんでした。

立山防空ごうに行ったとき、「涼しい、これなら平気かも」と、一瞬思いました。でも、4,000度あることを次の日に知り、「たえられないじゃん」と思いました。前にガラス棒を作ったとき、ガスバーナーの火がすごく熱くておどろいたのですが、原爆投下地点半径1km以内の地面の温度は、ガスバーナーの何倍も熱いなんて、想像できません。

クーラーをつけて、冷たい飲み物を飲んで、アイスやお菓子を食べながら、ゲームや勉強をできる環境が、今は当然のようになってきています。人はその上を目指していますが、人は自分を支えてくれる人がいれば、他のものを犠牲にしがちです。それ以上の幸せを求める気持ちが、原爆を生み出し、人々を苦しめる。そしてその気持ちが戦争を、核兵器を作り出しているのではないのでしょうか。

青少年ピースフォーラムで、永野悦子さんが、自分のまわりで起きたことを淡々とした口調で話してくださいました。感情をこめると泣いてしまうから、ということを知りました。遠くでお顔はよく見えなかったのですが、気がつきませんでした。永野さんは泣いていたそうです。永野さんのお話は、今までに聞いた被爆体験講話の中で、一番心にしみた気がしました。平和大使として長崎に行けて、目で見て、耳で聞いて、体で感じることができ、本当によかったと思っています。たくさんの人に、感謝しています。被爆者のさけびを、耳をふさがずに、たくさんの人

に聞いて欲しいです。そうすればいつか、戦争と核兵器が、世界中からなくなると
思います。私はまだまだ未熟ですが、このことを胸に、一步一步前に進んでいき
たいと思います。

『六十七年前の夏』

常盤平中学校 1年 佐藤 優海香

私は、めったに見たり聞いたりできないことを、平和大使として長崎に行くことで学ぶことができました。

長崎のにぎやかで緑の多いまちは、原爆が投下されたということを忘れてしまうくらいきれいでした。しかし、平和案内人の方や、青少年ピースフォーラムでの永野さんのお話を聞いて、私が考えていたより多くの被害があったことがわかりました。たった一つの原爆で7万4千人もの命を奪い、建物も原型をとどめないまでに破壊されました。原爆資料館で見た11時2分で止まった時計、傷ついた人々の写真……それらを見て原爆が落とされたときのことを考えると、言葉で表現できないくらいひどい光景があったのだと思います。

原爆が落とされてから67年がたち、戦争を体験した人は少なくなってきています。長崎で学んだ戦争や原爆の恐ろしさ、平和の大切さを語り伝えていきたいと思っています。

今回の平和大使長崎派遣はとてもいい経験になりました。ありがとうございました。

『忘れられない長崎の悲げき』

六実中学校 1年 阿部 裕美

長崎には人々の笑顔がたくさんありました。みどりがたくさんありました。原爆が落ちました。笑顔が消えました。みどりが消えました。命が消えました。一つ落とされただけなのに、一瞬にしてすべてが奪われてしまった悲しみは、今の人達に考えられるでしょうか。私は少し戦争のことを勉強したばかりで、本があれば目を向けていました。ただそれだけで、興味半分読んでいただけでした。実際に長崎という現場に行き、見て、触れて、感じて、嗅ぎました。原爆投下直後の長崎の写真を見ると、そこに人がいたとは思えません。なぜなら、さっ風景だからです。残っている物もないしこわれているところもあります。こんなところで生きていくことが現代の私たちにできるでしょうか。私は今の生活に甘えていて、想像もできません。

しかし、私はぜったいに戦争をしてはいけないということを、この目に、この耳に、この体にきざみこみました。命まではうばわれてなくても、かならず一人一人がなにかをうばわれたと思います。

私は、この戦争がなぜおきたのかよく分かりません。食料は分け合えばいいのではないのでしょうか。みんな仲良くすればいいことなのに、長い戦争を続けて日本はおろかだっただと思います。この2012年の私たちのように仲良くできないのですか？とたずねてどなりたいです。戦争は悲しみを生み、たくさんのものもうばっていきます。それでもまだこの世界には戦争をしている国があります。この悲しみとおそろしさがわからないのでしょうか。戦争は二度としないと宣言した日本が、その国々に伝えたらどうでしょうか。もし無駄であっても、たくさん体験談を聞か

せ、戦争はぜったいにしてはいけないということ、長崎と広島の悲げきを伝えても
っとたくさんの方が平和になり、最終的には世界の全員が手をつないで仲良くなっ
たらいいなと思います。

『次世代へ贈る言葉』

小金南中学校 3年 宮本 龍一

今、日本ではあの夏を体験した人が徐々に少なくなっている。僕達にとって、被爆体験講話を聞いたり、平和祈念式典へ参列できる事は普段の生活にはない、とても貴重な体験だと思う。やはり事前学習をしたり、資料を見るよりも被爆者の話を自分の耳で聞いている方が、格段に戦争の悲惨さや命の尊さが伝わった。被爆者は、「一人でも多くの人に伝えたい。このようなことは二度とおこしてはいけない。」という熱意が強い。しかし、「感情的になってはいけない、涙を流さないように」と、辛さに耐えて話してくださった。このことは僕の心に強く響いた。忘れてはいけない。ただ忘れないのではない。次へ繋げていく必要がある。そして重みを感じなければならないと思う。無知は言い訳だということも感じている。

悲しんでいる人は今も大勢いる。そのことを今までは深く考えたことがなかった。僕らが長崎へ行った日はとても暑かった。このような日に約500メートル上空で3,000から4,000千度の熱線と秒速約170メートルの爆風があったのだ。そして今、僕はその地に立っている。地中にはたくさんの遺骨が埋まっている。僕らはその上を堂々と歩いていた。正直、歩きたくなかった。歩いてもいいのかと不安になっていた。そして、ここに原爆が落ちたとは信じられないくらい綺麗であり、美しい緑にあふれているのに感動をおぼえた。

僕達は、過去の悲惨な戦争を教科書の1ページで学ぶことだけに止めてはいけないのではないだろうか。なぜなら、実際に行って見ないとわからないことがたくさんあったからだ。考えるだけでなく実行しなければ意味がないと思う。まずは事実を知る。知らないとは何もはじまらない。戦争の恐ろしさ、核兵器の実態、それまで

ずっと、当たり前にあった場所、当たり前にあった時間、無くなってはじめて気づく当たりのすばらしさ。

今がどれだけ平和で安全であるかに感謝して、今後、二度と戦争を繰り返してはならないというメッセージを『次世代へ贈る言葉』として語り継いでいきたいと強く思う。

『止まった時間』

古ヶ崎中学校 1年 樋口 杏

今から67年前の、1945年8月9日午前11時2分。一瞬にして何万人もの命がうばわれました。原爆が落とされたとき、私たちが住んでいる千葉県にも、ものすごい音がしたそうです。被爆体験講話では、たんと話している永野さんにおどろきました。私なら戦争のことを思うだけで悲しくなります。永野さんは、本当はそんな悲しいことを思い出したくないけれど「戦争の悲惨さを伝えなければならぬ。」と思い、話してくれたのかなあと感じました。永野さんは戦争で家族を亡くしたそうです。戦争中は、好きな物も食べられず、少しの量しか食べられなかったそうです。私は家族もいるし、毎日栄養のあるものが食べられ、本当にぜいたくな生活をしていると思ひ直しました。

原爆資料館では、原爆が落ちたときにあった現物を見ました。熱線で形が変形したビン、焼けた服や皮ふがただれている写真を見て、そのときのすさまじさがわかりました。皮ふがただれた写真を見たとき、いたいたしくてしかたありませんでした。

平和祈念式典で感じたことは、被爆者たちの合唱を聞いて、私たちが戦争の悲しさを伝えようと思ったことです。あの止まった時間から戦争や平和について活動している皆さんを見て、私も何か役に立つ事を探しながら力強く生きていこうと思ひました。

黙とうでは、亡くなった人への思いと、これからの平和への願いをこめました。

私はこれから、身近な人たちから、戦争の悲しさを伝えていこうと思ひました。それが平和大使の役目だと思ひたからです。

こんな貴重な体験をして、とても勉強になりました。本当にありがとうございました。

『あの一瞬で…』

牧野原中学校 2年 高橋 あみ

昭和20年8月9日11時2分。

67年前のこの瞬間。あの時間に生きていた人は、一つの原子爆弾で悲しみ、苦しみ、そして、命をうばわれ、無数のたましいが、長崎の空に浮かび上がったことでしょう。

平成24年8月9日11時2分のサイレンの音とともに目を閉じると、私は「戦争なんて…」と強く感じました。これは決して、私だけの感情ではなく、日本国民全員だと思います。しかし、もう過去に戻る事が出来ません。だからこそ今の私たちに出来るのは、あの悲劇をまだ知らない私たちと同じ世代に伝え、仲間に、日本に、世界に平和をうったえていくことです。

残念なことにあの悲劇をもたらした原因の一つである「放射線」で苦しんでいる人がたくさんいます。

東日本大震災で東北地方は多大な被害をうけ、福島原子力発電所は稼働困難になっています。大きな津波で帰る場所がなくなり、ふるさとがなくなってしまった人もたくさんいます。長崎も一度はなにもなくなった焼け野原だったのに、今や緑の多い美しい町にもどっています。どんなにひどい被害を受けても日本は必ずもう一度立ち上がれるのです。次は東北にふるさとをつくってあげましょう。そのためには、一人ひとりが今の幸せを大切にすることです。幸せに気づくことです。そうすれば必ず、周りの人も幸せに出来るはず。この輪がつながれば、大きな一つの輪になれば、この夢はかなうのです。

もう一度心を一つにしましょう。

最後にこのような機会を与えていただきありがとうございました。この体験を決して忘れることはありません。

『平和大使長崎派遣に行って…』

根木内中学校 2年 遠藤 未羽

私は、今年の夏に長崎に平和大使として行って、たくさんのことを学んだり、見たり、聞いたりすることが出来ました。

一つ目は、67年前の8月9日午前11時2分に長崎に原爆が落とされたことです。一瞬にしてたくさんのお人の尊い命がうばわれました。その原爆の被害は3つありました。

そのうちの一つは、高温の熱線です。熱線で皮膚が焼けてしまった人もいました。

もう一つは爆風です。爆風は、飛行機の約二倍の勢いで家や人まで吹き飛ばしました。

もう一つは、放射線です。放射線は、目に見えたり臭いがしたりはしないので分かりませんが、原爆が落ちて爆発した瞬間はすごい量の放射線が出ます。それを浴びてしまった人は、苦しんで死んでいたり、白血病になって今も困っている人がたくさんいます。

私は、この3つのことについて聞いたときは改めて原爆は、恐ろしくて怖いものだと思います。

二つ目は、「青少年ピースフォーラム」に参加して、改めて平和なときやそうではないときについて話し合いました。私たちにとって平和なときは、毎日おいしいご飯を食べ、家族と暮らしていることです。私たちは今、毎日平和に暮らせていることが当たり前ですが、原爆を受けた人たちはこの当たり前の生活が出来なかったのです。だから、これからは、平和に暮らせることを大切にしようと思いました。

私は、今回の平和大使長崎派遣で学んだことを友達や親戚などに伝えて原爆の恐ろしさを知ってもらい、二度とこんなことが起こらないようにたくさんの人に伝えたいと思いました。

『原爆について学んだこと』

河原塚中学校 1年 後藤 陽

昭和20年8月9日11時2分、その時に上空500メートルから長崎に原爆が落とされました。この広い世界の中で日本の広島と長崎だけに落とされた理由は、今まで空襲の被害をあまり受けていなかったのが、広島と長崎に原爆が落とされたのだと思います。

私が特に印象に残ったのは、永野悦子さんの被爆の体験談です。永野さんは16歳の時に原爆を体験したそうです。その日は防空ごうに入っていたのですが、もう出ていいという指示が出たので仕事に行ったそうです。そして、働いているととても大きな音がして、その瞬間、爆風が来たそうです。その後、悦子さんの皮膚はケロイド状になってしまいました。

私がこの話を聞いて思ったことは、原爆はとても怖いものだという事です。長崎に行き今自分たちが歩いている下に人が埋まっていると思うとあっという間に恐ろしくなりました。なぜ人類は原爆などという恐ろしい物を作ったのか意味が解りません。

今回長崎に行けて良かったことは、私達が原爆のことを知って他のみんなに伝えることができたことです。そして、長崎平和大使の一員として長崎に行き学べたことをとてもうれしく思います。私は原爆について学んだことをもっともっと伝えていきたいです。

『広めよう 被爆者の想い』

新松戸南中学校 2年 鈴木 里歩

私はこの夏、初めて長崎に行き、一生忘れることのできないことをたくさん学びました。初めての長崎県の第一印象は「本当に原爆が落ちたの？」でした。長崎は、街並みがとても美しく、特に親切な方が多かったのが、すばらしいな、と思いました。

しかし、その後に私が学習したものは、衝撃的なものばかりでした。

私は3日間のうちの8月9日、地域の方も遺族の方も参加することが難しい貴重な式典に参列しました。そこはテレビで見るのとは違い、いる人にしか分からないものがありました。「黙とう」では、サイレンと同時に赤い炎が立ちこもり、やけどをした人が「助けてー。」と言っている姿などいろいろなものが、頭の中に浮びました。67年前、私は生きていないはずなのに不思議な体験でした。

この平和大使長崎派遣のテーマである「より多くの人々に伝えていくこと」について、私が考えたことは…

- 1 戦争はこれから絶対にやってはいけないこと
- 2 家族で生活できるということは、とても幸せだということ
- 3 命を大切にすること

私は、これから被爆者の方が亡くなって、いなくなってしまう前に、もっとたくさんの方のことを知り、被爆者の方の思いを代わりに、平和な日本の未来に、伝えていきます。そして、これからは私たちが、将来の日本を動かします。被爆者の方々が67年前のあの日から、今日まで努力してきたものを無駄にしないために私は、頑張ることを忘れません！

『平和と過去』

和名ヶ谷中学校 1年 岩崎 いぶき

長崎は、親切な方が多くて、町もきれいで、猫がのびのびとすごしていたり、木々が多く、緑にかこまれていてとても「平和」を感じる場所でした。

本当に核兵器が落ちたのか信じられませんでした。でも、実際は、とても残酷で悲惨なものでした。

人の命を一瞬で奪い、苦しみながら命を落とした人がたくさんいて、核兵器を落とすなんて人をなんだと思っているのかと怒りがこみあげました。

被爆体験者の方のお話を聞いたときは、とても暑かったのに、体じゅうに鳥肌が立ちました。怖くて、苦しくて考えると胸がしめつけられる思いでした。今もまだこの世界に核兵器があるのは、不安でしかたありません。もう二度とこの辛い思いをする人が出ないでほしいと強く思います。

核兵器のない世界がきっと来ることを信じ、そのためにも、私はたくさんの人に核兵器や平和のことを伝えていきたいと思います。

最後にこのような体験をさせていただき、ありがとうございました。

『原爆のおそろしさ』

和名ヶ谷中学校 3年 伊藤 梢

まだ私が生まれていない、今から67年前の8月9日午前11時2分に長崎の町に原爆が投下され、多くの方が亡くなり、町も一瞬で焼け野原となりました。

そして、2012年8月9日、14歳の私は、平和祈念式典に参列させていただきました。会場のテントに入ったとき、今までに私が味わったことのないなんともいえない空気でした。式典の始まりは、被爆者合唱の『もう二度と』でした。その中の「もう二度とつぐらないで私たち被爆者を」という歌詞の部分がとても心にしみました。「黙とう」で目を閉じたときは、被爆者の方の悲しみが伝わってきて、これからは平和を築いていきたいと思いました。

二日目に参加した青少年ピースフォーラムで、被爆体験講和でのお話を聞いたときは、胸がしめつけられるような内容ばかりでした。この戦争体験のことを話してくださった方は、「この悲しみは一日も忘れたことはありません。」とっていて、その言葉が印象に残りました。戦争中は、食べる量も限られていて、おいしいごはんではなく、口に合わないものばかりだったそうです。家族の死や、変わり果てた人々がそこらじゅうにいたり、すごく残酷だと思いました。私は、今ではありえないことを聞いたので、おどろきと、戦争のこわさが初めてわかりました。

そして、今でも世界には二万発以上も核兵器があります。私は、なぜそんなに核兵器があるのかとても疑問だし、まだ戦争をするつもりなのか、と思うと本当に許せません。多くの人々に核兵器のおそろしさを知ってもらいたいです。今回の長崎派遣で学んだことを多くの人に伝えていって、みんなで平和を築き上げていかないといけないと思いました。今、私ができることは友達と仲良くして毎日楽しく過ご

すことだと思えます。そして、この世界から一日でも早く核兵器が無くなることを願います。

最後に、四日間お世話になった市役所の方や一緒に行った大使のみんなに感謝します。長崎で学んだことは一生忘れません。ありがとうございました。

『過去から未来へ』

旭町中学校 1年 紀藤 颯斗

長崎は、近代的な建物が多く、とても明るく、にぎやかな町だった。1945年8月9日、この街を一瞬で焼け野原にした原爆が落とされたなんて僕には信じられなかった。

原爆がどんなに悲惨なものだったのかを、思い知らされたのは、被爆者の方の話を聞かされたときだった。皮ふがむけたり、内臓がとびだしていたり、遺体が真っ黒になっていたり…。その言葉を聞いているだけで気持ちが悪くなってきた。だが、これは現実だ。目をそむけずに、そのことを受け入れなければならない。被爆者の方は、自分の弟と妹も亡くなったことを教えてくれた。悲しい出来事を淡々とした調子で話している姿から、悲しみがいっそう伝わってきた。かわいそうだと思うよりも、とてもありがたく思った。思い出したくもないことを後の世代へ伝えるために、僕らに語ってくれたことに、感謝しなければいけないと、強く思った。

原爆資料館では、今まで聞いたり、読んだりしていた知識が現実となって僕の目の前に現われた。それは、言葉では言い表せないほど残酷で悲惨な光景だった。一瞬で全てのものをうばいってしまった原子爆弾。

僕たちが今出来ることは、広島、長崎で起きたこの悲劇を過去の出来事としてではなく、事実を未来に伝えていくことだ。それぞれの国を、自分たちのものとして捉えず、世界全体を一つの国として考えること。そうすれば、戦争は決して起こらないだろう。平和を願う僕の心は、ちっぽけなものであっても、多くの人が集まれば、必ず大きな力となるはずだ。長崎へ訪れたことを無駄にはしたくない。そのためにも、今出来ることを一つずつやっていこうと思う。

『生きていくことの大切さ』

小金北中学校 1年 川村 香奈美

私が長崎派遣で学んだことは、命の大切さや家族、友達の大切さです。一瞬にして強い爆風と熱線、そして放射線が長崎の人々を襲いました。爆風は飛行機より速いスピードで人々を襲ったと聞きました。そして放射線は外部からも内部からも人の命を奪ってしまったそうです。外部からの放射線を浴びると毛が抜けたり嘔吐のような症状、内部からの放射線は、生きのびた人でも時がたつにつれて白内障、白血病、ガンなどをひきおこすことがあるそうです。熱線では、皮膚が焼けて剥がれ落ち、骨などが露出していたそうです。

私達は今、好き嫌いしているけれど、食べ物や着る服には限度があったらしく、今みたいにスパンコールなどが付いた服などは着られなかったそうです。そして当時は、さつま芋をふかしたものなどしか食べられなかったそうです。私達は今の生活を当たり前のように過ごしていたけれど、当時は今みたいに裕福ではなかったとわかりました。食べ物はとても大切だから、残さずに食べようと思いました。

被爆者の永野さんの話を聞きました。永野さんは14歳から働いていたそうです。長崎に原爆が投下されたときに永野さんは仕事場で被爆したそうです。そして自宅に向かうとき、「水を下さい」と会う人達に言われていたそうです。そして、橋を渡る時に、橋の先が火の海で、川のところには人が浮いていたそうです。

私は長崎に行って、核兵器の恐ろしさや命の大切さ、そして家族や友達の大切さを学びました。これから友達を沢山作り、そして家族や友達を今よりもっと大切にしたいと思います。

最後にこんな貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

『長崎で感じたこと』

聖徳大学附属女子中学校 2年 石井 そら

私はこの3泊4日の平和大使長崎派遣を通じてたくさんのことを学びました。特に心に残ったことは3つです。

一つ目は平和案内人の方による被爆建造物のガイドのときのことです。私はその方が最初におっしゃったことが印象に残っています。「今日はとても暑いでしょ。67年前の8月9日もこんな照りつけるような暑さの中で原爆が落とされて、3,000から4,000度の熱線を浴びてもっともっと熱かったんだよ。」という言葉です。これを聞いたとき、一瞬67年前のあの夏にいるような感覚を覚えました。また、原爆中心地では本当に67年前にここに原爆が落とされたのかと疑ってしまうほど緑豊かなきれいな場所で、被爆後の長崎市民の方々の復興に対する熱心な思いが感じられました。でも私たちが歩いている地下には今だ回収されずに残っている骨などもあるということを聞いたときはとても悲しい気持ちになりました。

二つ目は原爆資料館でのときのことです。資料館では特に展示してあった写真が忘れられません。つい目をそらしてしまうような悲惨なものが多く、私は人間が人間にするような行為ではない、また二度とこのようなことを起こしてはならないと強く感じました。

三つ目は平和祈念式典への参列のときのことです。被爆された方々や地元の生徒による合唱では『戦争をもう二度と繰り返さないで』『原爆で亡くなった人たちは帰ってこない』といううったえが歌われていて私は心が痛みました。また11時2分の黙とうではサイレンが平和の鐘とともに流れました。原爆が落とされたときの様子が浮かんでくるようで心に重くのしかかりました。

今回被爆地長崎で平和学習をして、改めて平和の尊さや命の重み、核兵器の怖さを学び実際にこの目で確かめることができました。そしてこれから、学んだこと、感じたことを平和大使として身近な人たちから伝え、広めていきたいと思います。

最後に、私が貴重な体験ができたのは長崎でお世話になった方々、市役所の方々と四日間を一緒にすごした平和大使の皆さんのおかげです。本当にありがとうございました。

『長崎平和大使になって』

専修大学松戸中学校 1年 中山 皓一郎

毎年、8月6、9、15日はテレビの前で式典を見ることが僕と祖父の決まり事でした。なぜかという、祖父は第二次世界大戦中に兵隊で、祖母は東京大空襲で逃げた経験があり、二人とも僕に少しでも戦争のことを知ってもらいたかったからだと思います。でも、今年の8月9日は違いました。僕は松戸市の長崎平和大使として参列をしていました。そこではいつもより心が痛く、締めつけられるような気がしました。

長崎で僕は、被爆者のお話を聞いたり原爆により一部しかない浦上天主堂の壁、11時2分で止まった時計などを見たりすることができました。それは、耳を塞ぎたくなったり、目を背けたくなるものばかりでした。でも、これらは事実でした。67年前の長崎で、そこには本当に一生懸命生きた人がいました。そして、たった一発の原爆により約7万4千人の人が亡くなりました。辛くて、苦しくて、悲しくて、どうしたらいいか分からない、そんな人がいたことは本当の事でした。被爆者の永野さんは「もう戦争はやめてくれ。」という思いで僕達に話してくれました。僕の祖父は、けっして戦争の話はしてくれませんでした。それは、僕の母にもしなかったそうです。祖父がなぜ話をしてくれなかったのかは、まだ分かりません。でも、毎年黙とうをしていた祖父や永野さんや長崎の人達の「二度と戦争やこの悲劇の気持ちをする人がいてはいけない。」という気持ちは、痛いほど分かりました。

今、僕はテレビで原子力発電所のニュースを見えています。原爆も原子力発電も同じ原子力によるものです。原子力は人間が発明したものです。だから、戦争などに使うのか、人間の役立つものに使うのかを人間が考えていかなくてははいけないと思

います。

今回長崎へ行って、直接いろいろな方から戦争の事を教えてもらい、本当に辛い思いをした人の気持ちが、少しだけれど、自分の気持ちとして考えられた気がします。この経験を生かし、もうこれ以上戦争などを起こさないために、今何が僕にできるか、これからもずっと考え続けていきたいです。

最後に、今回長崎の式典などに参加させていただき、本当にいろいろなことを考えることができました。ありがとうございました。

平和大使長崎派遣を終えて

(随行職員)



市内中学校20校から22人が平和大使に任命され、長崎の地で4日間ともに平和について学んでまいりました。

市内、それぞれの中学校から集まった中学生は、学年もさまざまで、出会ってあまり日も経っておらず、そのような22人が仲間として如何に絆を深め、何を得てくれるのかを期待し、同行させていただきました。

これまでの日程では、2日目の自由学習として立山防空壕や出島資料館、長崎歴史文化博物館などの施設見学を行っていました。

このような中、昨年5月に出席した日本非核宣言自治体協議会の総会研修において被爆・平和関連施設視察があり、平和案内人（ボランティアガイド）の説明で原爆落下中心地公園や城山小学校などを案内していただきました。平和案内人の説明は、被爆当時の写真や絵を使った視覚に訴える資料の活用と被爆者から聴き取った、実際の話をも多く聴くことができる内容で、そのときの情景が目には浮かび、過去のことでなくまるで目の前で起こっているかのように語られていました。

長崎市には、被爆建造物等を一緒に巡りながらガイドをしてくれる平和案内人がいて、被爆者の高齢化が進む中、被爆の実相と平和の尊さを次世代に伝えていくために活動をされています。そこで、今回の自由学習を平和案内人に碑めぐりガイド（被爆建造物等ガイド）をお願いして、2班に分かれて原爆落下中心地公園、平和公園、旧松山町防空壕そして城山小学校をめぐるしました。同行した班の案内人の方は、城山小学校2学年の時に被爆をされ、ご両親や家族を失ってしまったそうです。被爆直後のお話とともに、碑めぐりをした土地の下に、仲間の遺骨が未だに眠っていることへの悲しみや怒りの気持ちを語り、また、「世界の料理人は誰だと思う」と大使に問いかけ、「それは、みなさんの母親だよ」と語りかけてくれました。それは、幼くして母親を原爆で亡くしているので、ご自身は母親の料理を食べることができなかった辛い思いを込めて、世界の料理人は母親とお話しされたのです。また、城山小学校の在校生の中で数少ない生き残ったお一人として、家族や友人の大切さ、そして誰に対してもやさしい気持ちで接して欲しいとの話をしてくださいました。平和案内人が話された言葉から、私自身も、人として大切なことを、短い時間の中で数多く学ばせていただきました。

青少年ピースフォーラムでも、被爆体験講話をされた永野悦子さんから「自分が寂しいと思うわがままで、鹿児島に疎開をしていた弟と妹を呼び戻してしまった。自分は、防空壕で助かったが兄弟は亡くなってしまった。」という罪悪感を今も持ち続けているとの話をお聴きしました。そして、高校生が務めるピースボランティアが中心となって2日間にわたり「平和のために何をすべきか」をテーマに10人程度のグループに分

かれて意見交換や発表を行いました。

22人の平和大使が、原爆の実相や戦争の悲惨さ、そして平和の大切さを平和案内人による被爆建造物のガイドや被爆体験講話などで「見て」「聴いて」「体感する」ことで得た気持ちや知識を糧に、全国から集まった同世代の仲間と平和について真剣に話し合っているまなざしに、大使それぞれの平和に対する熱い気持ちが伝わってきました。

帰庁後の副市長への報告会でも、「平和案内人や語り部の永野悦子さんが淡々と語っていたからこそ、その奥にある悲しさや辛さ、そして、親や友人を大切に思う気持ちが心に伝わってきた。」「平和大使長崎派遣に参加して両親、家族、友人の大切さがよく分かった。」「長崎で、見たこと、聞いたことを家族や友達に伝えていきたい。」など、平和に対する思いを引き継ぐ大切さについて報告している姿に、大使それぞれが多くのこと気づいてくれたと確信をしました。

この報告書をまとめていた、10月上旬に「学校の部活動で平和大使長崎派遣について発表するので話が聞きたい」と、平成22年度に平和大使を務めた高校生が市役所に見えました。大使を務めてから2年が経ち高校生になった現在、部活動での発表テーマに平和大使長崎派遣を選んできたことへの、うれしさがこみ上げた瞬間でした。

平和大使長崎派遣事業は、今年で5年目となり派遣した中学生も、今回をふくめると88名になります。この皆さんが平和大使の体験で得たことを広めて語り継いでいって欲しいと痛感するとともに、大使経験者が集える場、活動できる場の必要性を強く思いました。

7月8日、第5回「平和大使長崎派遣」結団式、大使の一人一人が緊張の面持ち、私自身も緊張していたことを覚えています。その時に随行という責任と共に、自分自身が「勉強してきます。」と話したことは、3回のオリエンテーション、3泊4日の長崎の派遣の際も常に心に持ち続けていました。

22人の大使達は、事あるごとに「平和大使長崎派遣」の目的を伝えられ、自分達の責任を強く自覚するようになったようです。大使達の心が一つになったのが、8月7日（火）長崎での1日目の夜だと思っています。事前に個人で作ってきた鶴を22人の手で千羽鶴として完成させ、22人の意見をまとめて千羽鶴に添えるプレートの言葉を考えました。決定した言葉が「未来へ続く平和の架け橋」。一つのことを、同じ場で一人一人の意見を大切に、やり遂げた。完成記念写真の一人一人の笑顔が印象的でした。一人一人の心の中に平和はあると強く思いました。

私の一番の「勉強」は、2日目の平和案内人の方に原爆落下中心地から平和公園、最後に城山小学校と被爆建造物の説明と合わせて当時のお話を聞いたことから始まったと思っています。（大使達の2つのグループに平和案内人の方がそれぞれついてくれました。）自分の気持ちが大きく変わった瞬間は、「被爆当時の地層」を見て説明を聞いたときです。地層には、原爆によって壊された家の瓦やレンガ、熱で溶けたガラスや茶碗、針金などが見られ、当時この周辺に住んでいた人々の生活が伺われました。一瞬にして奪われた当時の人々の生活が今でも大量に埋没している。そして今、その上を歩いている。その後、自分自身が平和案内人の方のお話を、必死に書き取っていたのを今でも鮮明に覚えています。大使達にとっても、原爆が投下された時と同じように暑い中、汗をかきながら歩いてお話を聞いたことで、その後のピースフォーラムや67回目の平和祈念式典が、より現実的なものを感じられたのではないかと思います。ピースフォーラムでの永野悦子さんの「どうしていいかわからないと思わないで、自分のことをしてほしい。」長崎市長の「今も傷跡は続いている。感じてほしい。67年前にどんなことが起きたのか。なぜ平和を求めているのか、心と体で感じてほしい。自分の心を自分で育てる大人になってほしい。少しでも心が変わったと体感できる数日間にしてほしい。」という言葉はしっかりと大使達の心に届きました。

そして8月9日、67回目の平和祈念式典。会場には、式典の始まる1時間半前に着きました。開式の時を、会場の雰囲気を感じながら、長崎に来てから今まで学んだこと、感じたことを思い起こしながら、待ちました。10時35分に開式、式典は粛々と進みました。そして原爆投下時刻の11時2分、呼びかけに合わせて黙とう。今まで感じたことのなかった厳粛な、そして静寂に包まれた黙とうでした。核保有国から初参列の米・英・仏の駐日大使を含め42カ国の代表が参列。また、原爆投下を命じたトルーマン元大統領の孫クリフトン・トルーマン・ダニエルさんが参列するなど、日本を原爆が投下された最後の国にするという日本と各国の強い思いを感じました。

大使達にとっても私にとっても、本当に充実した4日間でした。そのことを、帰庁後

の報告会で実感しました。大使達一人一人の言葉から、4日間の現地での貴重な体験、学んだことを伝えたいという熱い思いをその場にいた皆さんが感じたことと確信しています。

最後に、ご協力いただきました保護者の方々をはじめ、関係者の皆様に心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

7月8日、初夏の暑さの中、平成24年度平和大使長崎派遣結団式が行われました。今回で長崎派遣事業も5回を数え、一つの節目を迎える中、私は長崎派遣の随行職員を任されることになり、大変大きな責任感を感じながら事業に挑みました。結団式では市長から大使一人ひとりに任命書が手渡され、握手を交わしていました。大使達は緊張を隠しきれない様子で自己紹介もどこかぎこちなく、派遣が終わった今でも当時の大使達の顔は忘れられません。結団式後、1回目のオリエンテーションを行い長崎派遣の目的等を大使達に伝え終了しました。そして、2回、3回とオリエンテーションを重ねるごとに大使達もお互い打ち解け派遣に向けて準備を進めていきました。

そして迎えた派遣当日、松戸駅で出発式を行い、改めて総務課長から大使達に事業の目的を告げられ長崎へ向かいました。飛行機、バスと乗り継ぎホテルに到着後、立山防空壕へ向かいました。長崎は予想通りの暑さでホテルから15分ほどの距離を歩いただけで汗だくになり、大使達も長崎の暑さを痛感していました。夜は、事前に準備していた折り鶴を千羽鶴に仕上げ、鶴に添える言葉も決めました。大使達の平和への思いは「未来へ続く平和の架け橋」に決まり、完成したときの大使達の団結した様子に私の心もとても熱くなりました。

2日目の午前中はボランティアの平和案内人の方に原爆落下中心地、平和記念公園、城山小学校等の被曝建造物ガイドをお願いし、2班に分けて巡りました。大使達は約2時間のコースを歩き、平和案内人の説明を汗だくになりながら真剣に聞き、メモを取っていました。午後は青少年ピースフォーラムに参加するため平和記念会館に向かい、途中前日に完成させた大使の千羽鶴と市民の方々から送られた千羽鶴を献納しました。青少年ピースフォーラムは長崎市長の挨拶から始まり、被曝体験者の永野悦子さんの講話がありました。実体験の話を目の当たりにし、涙ぐむ参加者も大勢いました。その後は、長崎市内の高校・大学生によるピースボランティアを中心に各グループに分かれ身近な平和について意見交換を行ないました。大使達は積極的に意見を述べ、参加者と交流している姿が見られました。

3日目、第67回平和祈念式典参列のため平和記念公園に向かいました。厳重な警備のなか参列席へ案内され大使達も緊張した様子でした。式典には原爆犠牲者の遺族、被爆者の方、各国の政府代表など約6000人が参列し、原爆投下時刻の11時2分サイレンと共に平和の鐘が鳴り響き黙とうを捧げました。黙とうをしているとき目の前が真っ赤になったと感じた大使もいるほどこの式典への参列は長崎派遣においてとても意義があると思いました。式典後は前日に続きピースフォーラムの平和学習に参加し、各グループで平和宣言文を作成して発表を行ないました。皆それぞれの平和への思いを宣言文にして意見交換し交流を深め、ピースフォーラムも終了となりました。その後は夕食をとり最後の自由学習で大浦天主堂とグラバー園に行き長崎の思い出をたくさん作りました。

最終日、長崎を発つ日となりました。お世話になったホテルの方へ皆で挨拶をし、平

和についてたくさんことを教えてくれた長崎の地を出発しました。松戸へ向かう帰りの飛行機とバスの中では帰庁報告会に向けて大使達が一生懸命長崎で学んだこと感じたことをまとめていました。

そして、松戸市役所へ到着し帰庁報告会を行ないました。大使達は副市長へピースフォーラムでの平和学習、平和記念式典参列など平和について見て、感じたことをそれぞれの思いを報告してくれました。その姿は結団式の時とはまるで違いとても頼もしく感じると同時に、派遣事業の達成感を感じました。全員の報告が終わり副市長から大使達へ派遣事業の総括の言葉をもらい平成24年度の平和大使長崎派遣は終了しました。

私は、長崎派遣の始めから終わりまで大使達には原爆の恐ろしさ、戦争の悲惨さについて見て、触れて、感じたことを身近な人達に伝えていくという目的意識を常に持たせ、夜のミーティングでは1日を振り返りリーダーを中心に平和についてディスカッションをさせるなど平和学習一色で色々なお願いもしながら3泊4日を終わりました。その中で大使達は学んだことを私の期待通りに帰庁報告会で伝えてくれてとても感謝しています。今後、大使達には更に平和への意識を高めて平和の架け橋となってほしいと思います。

長崎平和宣言

人間は愚かにも戦争をくりかえしてきました。しかし、たとえ戦争であっても許されない行為があります。現在では、子どもや母親、市民、傷ついた兵士や捕虜を殺傷することは「国際人道法」で犯罪とされます。毒ガス、細菌兵器、対人地雷など人間に無差別に苦しみを与え、環境に深刻な損害を与える兵器も「非人道的兵器」として明確に禁止されています。

1945年8月9日午前11時2分、アメリカの爆撃機によって長崎に一発の原子爆弾が投下されました。人間は熱線で黒焦げになり、鉄のレールも折れ曲がるほどの爆風で体が引き裂かれました。皮膚が垂れ下がった裸の人々。頭をもがれた赤ちゃんを抱く母親。元気そうにみえた人々も次々に死んでいきました。その年のうちに約7万4千人の方が亡くなり、約7万5千人の方が負傷しました。生き残った人々も放射線の影響で年齢を重ねるにつれて、がんなどの発病率が高くなり、被爆者の不安は今も消えることはありません。

無差別に、これほどむごく人の命を奪い、長年にわたり人を苦しめ続ける核兵器がなぜいまだに禁止されていないのでしょうか。

昨年11月、戦争の悲惨さを長く見つめてきた国際赤十字・赤新月運動が人道的な立場から「核兵器廃絶へ向かって進む」という決議を行いました。今年5月、ウィーンで開催された「核不拡散条約（NPT）再検討会議」準備委員会では、多くの国が核兵器の非人道性に言及し、16か国が「核軍縮の人道的側面に関する共同声明」を発表しました。今ようやく、核兵器を非人道的兵器に位置付けようとする声が高まりつつあります。それはこれまで被爆地が声の限り叫び続けてきたことでもあります。

しかし、現実はどうでしょうか。

世界には今も1万9千発の核兵器が存在しています。地球に住む私たちは数分で核戦争が始まるかもしれない危険性の中で生きています。広島、長崎に落とされた原子爆弾よりもはるかに凄まじい破壊力を持つ核兵器が使われた時、人類はいったいどうなるのでしょうか。

長崎を核兵器で攻撃された最後の都市にするためには、核兵器による攻撃はもちろん、開発から配備にいたるまですべてを明確に禁止しなければなりません。「核不拡散条約（NPT）」を越える新たな仕組みが求められています。そして、すでに私たちはその方法を見いだしています。

その一つが「核兵器禁止条約（NWC）」です。2008年には国連の潘基文事務総長がその必要性を訴え、2010年の「核不拡散条約（NPT）再

検討会議」の最終文書でも初めて言及されました。今こそ、国際社会はその締結に向けて具体的な一歩を踏み出すべきです。

「非核兵器地帯」の取り組みも現実的で具体的な方法です。すでに南半球の陸地のほとんどは非核兵器地帯になっています。今年の中東非核兵器地帯の創設に向けた会議開催の努力が続けられています。私たちはこれまでも「北東アジア非核兵器地帯」への取り組みをいくどとなく日本政府に求めてきました。政府は非核三原則の法制化とともにこうした取り組みを推進して、北朝鮮の核兵器をめぐる深刻な事態の打開に挑み、被爆国としてのリーダーシップを発揮すべきです。

今年4月、長崎大学に念願の「核兵器廃絶研究センター(RECNA)」が開設されました。「核兵器のない世界」を実現するための情報や提案を発信し、ネットワークを広げる拠点となる組織です。「RECNA」の設立を機に、私たちはより一層力強く被爆地の使命を果たしていく決意です。

核兵器のない世界を実現するためには、次世代への働きかけが重要です。明日から日本政府と国連大学が共催して「軍縮・不拡散教育グローバル・フォーラム」がここ長崎で始まります。

核兵器は他国への不信感と恐怖、そして力による支配という考えから生まれました。次の世代がそれとは逆に相互の信頼と安心感、そして共生という考えに基づいて社会をつくり動かすことができるように、長崎は平和教育と国際理解教育にも力を注いでいきます。

東京電力福島第一原子力発電所の事故は世界を震撼させました。福島で放射能の不安に脅える日々が今も続いていることに私たちは心を痛めています。長崎市民はこれからも福島に寄り添い、応援し続けます。日本政府は被災地の復興を急ぐとともに、放射能に脅かされることのない社会を再構築するための新しいエネルギー政策の目標と、そこに至る明確な具体策を示してください。原子力発電所が稼働するなかで貯め込んだ膨大な量の高レベル放射性廃棄物の処分も先送りできない課題です。国際社会はその解決に協力して取り組むべきです。

被爆者の平均年齢は77歳を超えました。政府は、今一度、被爆により苦しんでいる方たちの声に真摯に耳を傾け、援護政策のさらなる充実に努力してください。

原子爆弾により命を奪われた方々に哀悼の意を表するとともに、今後とも広島市、そして同じ思いを持つ世界の人たちと協力して核兵器廃絶に取り組んでいくことをここに宣言します。

2012年(平成24年)8月9日

長崎市長 田上 富久

以下、長崎平和宣言（用語解説）から抜粋

◆非人道的兵器

無差別に人間を殺傷し、不必要な苦痛を与える化学兵器や生物兵器、対人地雷は、非人道的兵器として、禁止する国際条約があります。近年、世界の NGO の努力によって、クラスター弾をほぼ全廃させる禁止条約が発効されました。

核兵器は、兵士か一般市民かを区別することなく大量に人間を殺傷し、放射線の後障害により、長期間にわたって不必要な苦痛を与え、環境をも破壊する兵器です。

しかし、現在でも核兵器を禁止する条約はありません。

◆国際赤十字・赤新月運動が人道的な立場から「核兵器廃絶へ向かって進む」という決議

2011年（平成23年）11月スイスのジュネーブで、国際赤十字・赤新月運動代表者会議が開催され「核兵器廃絶へ向かって進む」という決議が採択されました。決議には、核兵器の使用を防止することが緊急の課題であり、どのような場合であっても、核兵器を使用することは国際人道法に違反することが述べられています。

また、すべての国家に対し、核兵器の使用禁止と完全廃棄を目指す交渉の開始と合意を要請しています。

※赤新月…多くのイスラム教国は「十字はキリスト教を連想させる」として、赤十字の代わりに「白地に赤い三日月」である赤新月を使用しています。使用に際しての条件、効力などは「赤十字」とまったく同一です。

◆核不拡散条約(NPT)再検討会議

(1)核不拡散条約

核不拡散条約は、核兵器保有国が増える(核が拡散する)ことを防ぐ目的でつくられた条約で、1970年（昭和45年）に発効しました。2003年（平成15年）1月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエルの3か国を除く190か国が加盟しています。

主な内容は、1967年（昭和42年）1月時点で核兵器を保有していたアメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国の5か国だけに核兵器の保有を認め（核保有国）、それ以外の国（非核保有国）が保有することを禁止しています。

核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実に行うことを求め、非核保有国

には核兵器の製造、取得を禁じています。

また、非核保有国には、原子力の平和利用が認められており、原子力発電所を建設する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関(IAEA)の検査を受ける義務があります。

しかし、イランは、原子力の平和利用を名目に核兵器を開発しているのではないかと疑いを持たれているほか、核保有国の核兵器の削減も進んでいないなど、多くの問題を抱えています。

核兵器の保有国を増やさないためにも、この条約内容に各国が真剣に取り組むことに加え、核兵器禁止条約など新たな取り組みも求められています。

(2) 再検討会議

核不拡散条約では、核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するため、5年毎に再検討会議が開かれ、その前に3回の準備委員会が開催されます。発効から25年後の1995年(平成7年)には、条約の延長を検討する「再検討・延長会議」が開かれ、無期限延長が決まりました。

2000年(平成12年)の再検討会議では、核保有国による核軍縮への努力が不足しているとの声が高まり、「核兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文書が採択されました。

しかし、2005年(平成17年)の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が鋭く対立し、何ら成果を得ることなく閉幕しました。

2010年(平成22年)の再検討会議は前年にアメリカのオバマ大統領が登場し、「核兵器のない世界」への機運が高まる中で開催され、核軍縮に向けた64項目の行動計画を柱とした最終文書が採択されました。

相手国が攻撃してきた場合、核兵器で反撃するという姿勢を見せることによって相手国の攻撃を思いとどませようとするのを、核兵器の抑止力といいます。しかし、抑止力に固執すると、お互いに相手国より強力な核兵器を保有したり開発しようとするために、逆に核兵器による攻撃の危険性が高まる可能性があります。

◆16 か国が「核軍縮の人的側面に関する共同声明」を発表

2012年(平成24年)4月末からオーストリア・ウィーンで2015年(平成27年)の核不拡散条約(NPT)再検討会議に向けた準備委員会が開かれました。その中でスイスやノルウェーなど16か国が共同で声明を発表しています。16か国は、核兵器の使用が人類の生存や環境に対して大きな脅威となることについて触れ、すべての国が核兵器を非合法化し、核兵器のない世界を実現するために努力するよう求めています。

また、特に核兵器国に対しては、国際法や国際人道法を重視するよう求めています。

◆1万9千発の核兵器

長崎に落とされた原爆は、通常火薬の約2万1,000トンの量に相当する威力があったといわれています。一方で現代の核兵器は、その数倍から数百倍の威力を持つものまであります。核保有国が持っている核弾頭は、使用できる状態にあるもののほか、ミサイルから取り外されているものの、再び使用できるよう保管されているものも含めると、アメリカ8,500発、ロシア10,000発、イギリス225発、フランス300発、中国240発となっており、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮などの推計もあわせると、世界中に1万9千発もの核弾頭があるといわれています。

◆核兵器禁止条約(NWC)

核兵器の開発、実験、製造、配備、使用をすべて禁止して、また、現在、保有している核兵器を解体して使えなくする条約です。

核兵器禁止条約は、国際司法裁判所が1996年(平成8年)に「核兵器の使用・威嚇は一般的に国際法に違反する」とした勧告的意見が始まりとなりました。

1997年(平成9年)に国際反核法律家協会など3団体が、「核兵器は違法」とする考えに基づいて、モデル核兵器禁止条約の案を発表し、同じ年にコスタリカ政府が国連に提出しました。

2007年(平成19年)には、コスタリカとマレーシア両政府が、核不拡散条約(NPT)再検討会議準備委員会、国連総会に改訂版の条約案を提出、2008年(平成20年)には潘基文国連事務総長も、核軍縮に関する5項目の提言を発表して、禁止条約の検討を加盟各国に求めています。2007年(平成19年)には、コスタリカとマレーシア両政府が、核不拡散条約(NPT)再検討会議準備委員会、国連総会に改訂版の禁止条約案を提出、2008年(平成20年)には潘基文(パン・ギムン)国連事務総長も、核軍縮に関する5項目の提言を発表して、禁止条約の検討を加盟各国に求めています。

◆非核兵器地帯

非核兵器地帯とは、ある区域内の国々が、条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束するものです。この条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることにもつながります。

(1) 中東非核兵器地帯

中東に核兵器やその他の大量破壊兵器のない地帯をつくろうという構想です。1974年(昭和49年)以降、エジプトが国連総会に決議案として提出し採択されています。

しかし、核兵器保有の疑惑のあるイスラエルや、イランの核開発の疑惑等の問題があることから、実現されていません。

(2) 北東アジア非核兵器地帯

北東アジア非核兵器地帯とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約として成立するためには、3か国に核兵器が存在せず、核保有国(中国、ロシア、アメリカ)は、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

日本では、1971年(昭和46年)に「非核三原則」の国会決議が行われ、また、韓国と北朝鮮による、「朝鮮半島非核化共同宣言」が、1992年(平成4年)に発効するなど、それぞれの国が非核化を表明しました。

しかし、2006年(平成18年)10月、北朝鮮が核実験を実施し、さらに、2009年(平成21年)5月に2回目の核実験を実施しました。2012年(平成24年)4月には長距離弾道ミサイルの発射に引き続き、核実験を強行するのではないかという不安が広がりました。

今後、「北東アジア非核兵器地帯」が実現するためには、国際社会が結束して、北朝鮮の核を放棄させることが必要となります。

◆非核三原則

非核三原則とは、核兵器を「持たない」「つぐらない」「持ち込ませない」という被爆国である日本政府の3つの原則のことです。

1967年(昭和42年)12月、当時の佐藤栄作首相が国会(衆議院の予算委員会)で表明しました。1971年(昭和46年)11月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針(国是)として決議(国会の意志を決めること)が行われました。

◆核兵器廃絶研究センター(RECNA)

2012年(平成24年)4月に長崎大学が学内共同教育研究施設として設置した核兵器廃絶に焦点を絞った日本初の教育研究組織です。核兵器廃絶に関する様々な情報の収集・分析を通して、学術的な立場からの政策提言を世界に発信することを目的としています。

2012年(平成24年)4月末からウィーンで開催された核不拡散条約(NPT)再検討会議準備委員会にも参加し、会議の動きや内容をインターネットでリアルタイムに発信しました。

◆軍縮・不拡散教育グローバル・フォーラム

2010年(平成22年)核不拡散条約(NPT)再検討会議で日本政府が呼びかけ、42か国が「核不拡散・軍縮教育に関する共同声明」を発表しました。

それに基づき、2012年(平成24年)8月10日と11日の2日間にわたって、国連大学と外務省が主催で軍縮・不拡散教育グローバル・フォーラムを長崎原爆資料館で開催します。フォーラムでは、将来にわたって軍縮を進めるために、次世代の軍縮専門家の育成と平和教育のあり方について議論が行われます。

◆国際理解教育

国際理解教育とは、自国の文化や伝統を大切にするとともに、他国の歴史や文化について理解を深め、自ら進んで外国人と交わろうとする国際感覚豊かな子どもの育成を図るものです。

長崎市では、国際化が進むこれからの時代にふさわしく、様々な国の人と共に生きる豊かな心を育てることを目的として進めています。

◆高レベル放射性廃棄物

原子力発電所などで使用した燃料から、ウランとプルトニウムを回収した後に放射能レベルが高い液状の廃棄物が生じます。これを高レベル放射性廃棄物と言います。

高レベル放射性廃棄物の処分については、これまで国際機関や世界各国で検討されていますが、有効な解決方法は示されていません。

原子力を利用した私たちの世代で考えなければならない問題です。

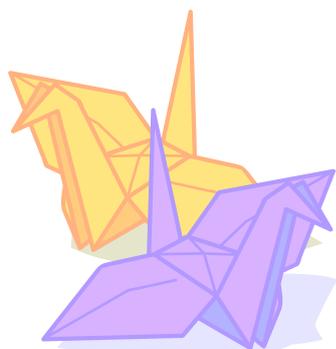


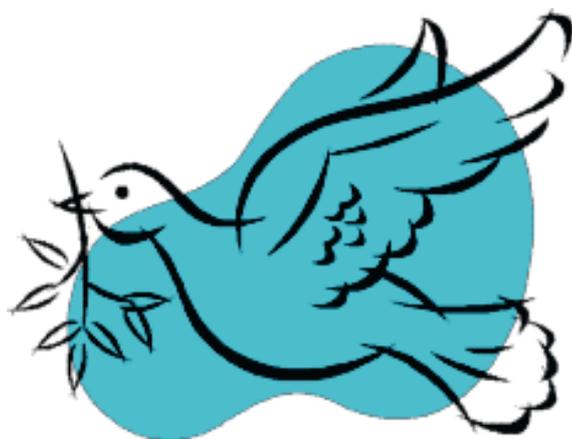
～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十年度(二〇〇八年)	1	熊川 実旺 (第四中 2年)
	2	別宮 賢治 (第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと (六実中 3年)
	4	片野 結依 (小金南中 1年)
	5	清水 のどか (古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃 (新松戸南中 2年)
	7	清水 健人 (金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈 (新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実 (旭町中 3年)
	10	黒木 若葉 (聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度(二〇〇九年)	1	川本 景介 (第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里 (第二中 1年)
	3	小幡 祐太 (第三中 1年)
	4	山田 政明 (第四中 1年)
	5	清水 彬奈 (第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子 (第六中 1年)
	7	増野 友梨奈 (小金中 2年)
	8	井山 陽菜 (常盤平中 2年)
	9	小林 美幸 (栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮 (六実中 1年)
	11	高島 里夏 (牧野原中 3年)
	12	西 志穂 (河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人 (根木内中 1年)
	14	四家 明宜 (金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華 (和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十二年度(二〇一〇年)	1	櫻井 和奏 (第一中 2年)
	2	吉田 彩乃 (第二中 1年)
	3	三橋 若奈 (第三中 1年)
	4	笹本 幸輝 (第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉 (第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美 (第六中 1年)
	7	神部 ちひろ (小金中 2年)
	8	田中 萌加 (常盤平中 1年)
	9	高梨 望 (栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士 (六実中 2年)
	11	大山 祭 (小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣 (古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹 (牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人 (根木内中 1年)
	15	富永 由也 (河原塚中 1年)
	16	石井 拓海 (新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志 (金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子 (和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ (旭町中 2年)
	20	新倉 花菜 (小金北中 1年)
	21	田村 陽香 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子 (専修大学松戸中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)	
平成二十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加	(第一中 2年)
	2	発地 空介	(第三中 1年)
	3	岸 健太	(第四中 1年)
	4	宗像 未来	(第五中 1年)
	5	天野 七海	(第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒	(小金中 2年)
	7	井山 祥樹	(常盤平中 2年)
	8	加藤 円来	(栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子	(六実中 3年)
	10	坂本 実優	(小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美	(古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子	(牧野原中 2年)
	13	山田 真平	(河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太	(新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来	(金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友	(旭町中 3年)
	17	板倉 日向子	(小金北中 1年)
	18	張 敏	(聖徳大学附属中 2年)
	19	平野 瑞帆	(専修大学松戸中 2年)





平成24年度
平和大使長崎派遣事業報告書
～未来へつなぐ平和の架け橋～

松戸市
総務企画本部総務課

平成24年11月発行